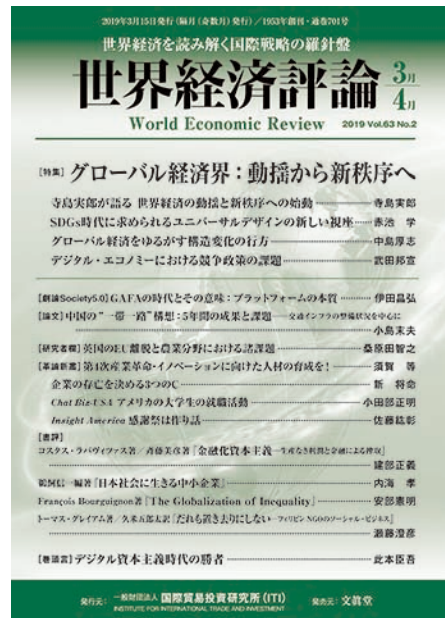


本論文は

世界経済評論 2019年3/4月号

(2019年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

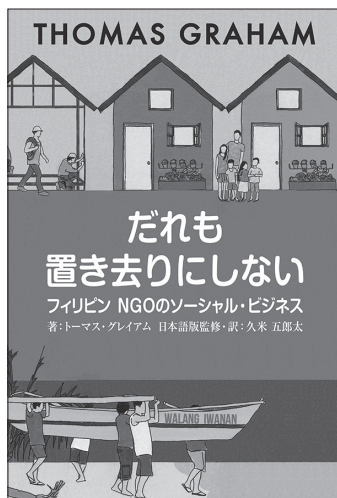
Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

だれも置き去りにしない

——フィリピン NGO のソーシャル・ビジネス

パリクラブ日仏経済フォーラム議長 瀬藤 澄彦



【著者】トーマス・グレイム (MADトラベル共同創始者)

【訳者】久米五郎太 (城西国際大学特任教授)

【発行】文眞堂, 2018年9月

【判型】四六判・タテ組・308頁

【定価】1800円+税

21世紀の最大の問題は貧困であることが日に日に明らかになってきた。なぜなら貧困は発展途上国だけではなく、所得水準の高い先進国においても深刻化してきたからだ。久米氏は時間を見つけては世界各地を旅している。その訳がこの本を読んでわかってきた。マイクロ・ファイナンスやソーシャル・ビジネスのことは私もジャック・アタリの本『博愛～新たなユートピア』を訳したときから承知していた。またノーベル賞受賞者バングラデッシュのムハマド・ユヌスが作り上げた銀行や国連や企業も関心を示すBOPビジネスのことは、大学の授業でも必ず取り上げてきた。それでも概念や理屈で講義する私の説明に何人の学生が興味を示してくれるかは自信がなかった。私の日本人の大手銀行の友人がなぜマニラを老後の住み家にしたのかもわからずじまだった。わたし自身がかつて社会主義軍事政権のなかで耐乏生活を強いられていた

貧困のアルジェーの駐在生活の経験をしているにも拘わらずである。

しかしこの本を読むと貧困が絶望との同義語でなく、実は希望と隣り合わせであることが理解される。なんという素晴らしい本であろうか。訳語が英国人の感情と気持ちをフレンドリーに語りかけてきて引き込まれて行く。それにしても世界の貧困の問題（途上国の絶対的貧困の問題だけでなく、先進国の普通の平均の生活ができない相対的貧困や社会的排除者の問題も含め）は、世界銀行や各国からのODA援助、あるいは先進国社会が誇る高度な社会保障福祉制度によっても解決されるどころかますます深刻化しているのである。

駐在経験のある日本人の間ではフィリピン人の温かさは定評がある。フィリピンの日本人駐在員は現地ではメイドを2人位雇って生活するが、メイド達は概ね子どもの扱いが大変上手で、子どもたちを大事にして、嬉しそうに面倒を見る。この本を読んでいるとそうした大家族の温かさを感じる光景が想像される。この本で描かれた助け合いの心はフィリピンに特に特徴的なことかも知れない。同時に、この本にはフィリピンで行われるソーシャル・ビジネスの実例が豊富に取り上げられている。これはフィリピンだけではなく、もっと広く通用するものと思われる。実際、世界各地から参加しているボランティアが、大きな衝撃を受けている様子が描かれている。その中には日本人学生も含まれている。日本の若者は内向きと言われるが、この本に登場する2名は積極的だ。また、日本でもフィリピンでインターン等の経験を経た学生は概ねフィリピンに好印象を抱き、大きなインパクトを感じて日本に戻ってくる。こうした取り組みが日本の若者にもっと開放される必要がある。

トーマ・ピケティが懸念している世界的貧困は国家でもない市場でもない中間団体の市民組織によってしか解決していかないのであろうか。原著者はこの本の執筆後はマニラで旅行代理店の仕事を立ち上げた。先進国の学生や若者、企業人に貧困の実情を自分の目で見、そこで働く貧しい人達とコミュニケーションする機会を与え、さらには社会の改良や環境の改善活動に結びつけるソーシャル観光の事業を展開している。こうした教育観光の実例は大きな希望の証である。(せとう・すみひこ)